Ｂテーブルグループ討議　目次

１回目 2

＜出席者＞
池坊　専宗　委員
田口　成人　委員
三川　夏代　委員

２回目 9

＜出席者＞
安野　貴博　委員
大井　葉月　委員
仲田　匡志　委員

３回目 14

＜出席者＞
伊住　禮次朗　委員
大竹　莉瑚　委員
杉田　真理子　委員

別紙２

第１回京都市未来共創チーム会議
Ｂテーブルグループ討議
議事録

テーマ：京都らしさを阻害するもの
Ｑ２.
他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とはどのようなものですか。
Ｑ２.
現状で京都らしさを損ねているものはなんですか。

１回目
＜出席者＞
池坊　専宗　委員
田口　成人　委員
三川　夏代　委員

三川委員
１つ目は、不変を受け入れると書いた。先ほどの事務局からの資料説明にもあったが、京都はとても歴史が長い。価値のあるものが時代ごとに蓄積され、蓄積されたということは時代を超えており、超えるためには誰かが引き継がなければいけないと思う。受け入れる側や引き継ぐ相手がいるという人が媒介し、価値が受け入れられながら、今の私たちの目の前に存在している。そのように考えると、京都は他のまちに比べて不変的なものを受け入れたり、それを不変として扱ったりしていると感じるので、不変を受け入れると書いた。
２つ目は、見立てるである。鴨川のように、不変的な文化や価値が目の前にある時に、ずっと引き継がれてきたのだから、何か価値があるだろうという前提に立って、これは何だろうかと、改めて自分たちが意味付けしたり、価値を再発見したり、何かクリエイティビティの働きがあるのではないかと思う。
３つ目は、静寂である。京都は今観光客が多く、まち中に行くと、本当にざわざわしているが、少し小道に入ると、急に静寂が現れることはすごく面白いというか、静寂があるからこそ京都のまち並みや文化が成り立っているのではないかと思い、静寂と書いた。
最後は、責任、規律である。不変や見立てるにつながるかもしれないが、過去から現在へ引き継がれ、さらに未来へとバトンタッチしていくに当たって、そこには責任や規律が生じるのではないか。守ったり、攻めたりする時に、自分たちだけではなく、過去の人たちや過去の価値も踏まえた上で、それをどのように守っていく、引き継いでいくというスタンスに立つので、先ほど京都市基本構想の主語が私たち市民であるという話があったが、物事をＩではなく、Ｗｅで考えていることが京都らしいと思い、それを責任、規律という言葉に置き換えた。

Ｂテーブルファシリテーター

続いて、田口委員にお願いする。

田口委員

１つ目は、懐の深さと書いた。私は大学から京都にいて、当時あまり友達がいなくて鴨川に１人でずっといたが、別に平気なくらい懐の深さがある。それと関連して、小商いと言うか、面白いお店や場所、勝手なことをしている人がたくさんおり、商いに限らず、大学などにも、自分で好きなことをやっている人が多いのは、懐の深さがあって可能になることであると思う。

先ほど見立ての話で、過去の不変的なものを引き継いで、価値を再発見するという話があった。私の中では再文脈化という考え方をしており、大事だとされているものを自分たちなりに再解釈し、今の人々にどのようにフィットさせるかを考えている人が多いことは面白いところだし、それを維持できればよいのではないか。

池坊委員

出身はどちらか。

田口委員

滋賀である。

池坊委員

滋賀の自然と京都の懐は空気感が異なるのか。

田口委員

滋賀もすごくいい所で好きだが、学生の時はカルチャーが足りないと思っており、単純な話、ＣＤ屋や本屋も京都と比べれば少ない。そのような意味でいうと、京都はいくらでも行く所があるし、どのような人も居場所を見つけられる土壌があるのではないか。大人になってこそ滋賀の良さに気付いたこともあるのだが。

Ｂテーブルファシリテーター

どのような人でも居場所が見つけられたり、実際に商いが起こっていたり、それぞれ共存できる感じか。

田口委員

そうである。この店は誰が行っているのだろうか自分には想像がつかない服屋さんがあるが、ずっと営業していたりする。

Ｂテーブルファシリテーター

続いて、池坊委員にお願いする。

池坊委員

１つ目は、ゆったりとした時間が流れていることである。東京と京都の二拠点で暮らしていることもあり、東京は目標、あるいは目的に向かって脇目も振らずに行く感じだが、やはり京都に降りると、大きなまち全体や人々の時間の過ごし方が少しゆったりしている気がして、これはすごくよいところだと思う。ビジネスや経済的に繁栄するだけではまちとしての機能が果たせないと思うので、やはり人が豊かに暮らせなければ、１日や日々のルーティンの中で余白や時間、季節の変化を緩やかに楽しむことができる余裕があるまち、それが京都のよいところであるというのが１つ目である。

もう一つは、一人一人にポリシーというか、京都は灰汁の強い人が多いと思う。東京も灰汁は強いが、京都の昔ながら住んでいる方のほうがコントロールはできないけれども、人情味がある。灰汁の強さや濃い部分がないと、１００年漬けたたれではないが、薄まっていくだけなので、現状や未来に合わせていくことと並行して、灰汁を溜めていくというか。それをしっかり守っていくことが京都の価値に必要ではないか。

先ほどの責任と規律で思ったのは、灰汁は強いが、周りのこともある程度は配慮するので、程よい衝突が起こり、京都の分散的な集団というか、皆のキャラクターは濃いが、緩やかにまとまっていくことが京都の面白いところかと思う。京都は一致団結してまとまるほどはいかないが、周りのことを緩やかにそれなりに考えている。

田口委員

同感である。みんな知り合い同士のようだが、仲がよいかはよく分からないことがある。

池坊委員

けんかしているのかと思っても、少し時間が経つと仲良くなっていたりする。

Ｂテーブルファシリテーター

何がこのような緩やかなまとまりを生み出していると思われるか。

池坊委員

長い歴史の中で、ものづくりのところも多いが、自分自身の家業などをやってきたことの軸があるので、これまで受け継いだことへの尊重や敬意の気持ちはあるだろうし、そこを簡単に変えてはいけないという気持ちは皆がそれぞれに持っているのではないだろうか。その上で新しいものも取り入れていくようになると思う。

三川委員

今の池坊委員のお話はすごくよいと思った。東京と対比すると、東京は人との関係性でまとまっていると思うが、京都は歴史があるから、あくまで人が媒介しているに過ぎない

ので、物や事の関係性でまとまっている気がする。だから、先ほど程よい衝突という話があったと思うが、それも人間関係の衝突というよりも、物や事の解釈、まとまりが捉えている価値によって衝突が起きているのかと、お話を聞いて思った。

池坊委員

京都に長くいる人はやはり京都が好きなので、細部では衝突しても京都全体の価値観というか、そのようなスタンスはつないでいこうということで合意が取れているように感じる。

田口委員

知り合いの着物屋さんは、あそこもやっているし、うちがやめるわけにはいかないと言っていた。それも良し悪しだが、少なからず人目があるという話をしていたことがあり、それはたぶん責任の話と紐付くのではないか。

Ｂテーブルファシリテーター

地域のつながりや、着物屋同士のつながりがとても強いと思うが、そのあたりが京都らしさをつくっていると思われるか。

池坊委員

京都ではないが、関西だと、三方よしなど、自分だけが繁栄しようとはしていないし、今は１つのプロセスがなくなり、それを吸収することが生まれているが、特に昔は伝統工芸も分散で作っていたから、１つがつぶれると、川上から川下まで全てが消えていくことを考えれば、持ちつ持たれつでやっているのだと感じる。京都の狭い距離感もそうだし、京都はそのようなものが強い。

Ｂテーブルファシリテーター

続いて、京都らしさを損ねているものについて、池坊委員から発表をお願いする。

池坊委員

１つ目は、まち並みが均一になっていることである。私は大学から東京へ行き、東京と京都を往復しているが、この１０年程で京都は大きく変わり、繁華街を歩くと、東京のミニマル都市だとよく思うことがある。便利に発展したと思うが、京都のまちの魅力が深まったかというと、必ずしもそうは言えないところもあるのではないか。良し悪しはあるが、外資が入ったり、いろいろな昔ながらのブランドがリブランディングしていたり、それは大事なことではあるかもしれないが、表面だけを京都の雰囲気に合わせるだけでは、灰汁ともつながるが、京都の濃いところがどんどんなくなり、よくありがちな都市の方向に進んでいくのではないか。既視感があるように感じる。

もう一つは、よく言われているが、観光客と地元の融和が取れていないことである。ビジネスでも何でもいろいろなステークホルダーいることもあるが、観光客がどんどん増え、

住民の暮らしが失われていくのも良くないし、観光客やインバウンドの経済的な恩恵が一部の事業者や一部の人に固まっていることも、京都のまちの発展という意味では良くないかと思っている。

多くの観光客が来て、バスに何本も乗れなかったり、交通が渋滞したり、調和に関して様々な問題が起きているが、それを享受する住民側にもしっかり配分する仕組みづくりが必要ではないかと思う。

Ｂテーブルファシリテーター

続いて、田口委員にお願いする。

田口委員

１つ目は開発である。先ほどの小商いの話にも関係するが、皆が好きなことをしている印象がある。ある本で読んだのは、京都は減価償却が終わっているという話があった。要するに家賃が安いから、隙間に入って新しいことを始めてしまう人がいるのではないかと書いてあった。均質化ともつながると思うが、何でも新しくきれいにしてしまうと、そのようなものがなくなっていくし、灰汁も抜けていくのではないか。

もう一つは、先ほど懐が深いという話をしたが、三方よしのような持ちつ持たれつだったり、お互いさまだったりというのが、京都だけに限らないと思うが、減っているのではないかということ。自分のことを優先するのは悪いことではないが、結局バランスの問題である。個人主義的な傾向が少し強まっているのではないか、このままいくと結構難しくなってくるのではないか。

市職員として特に規制などを扱っているので、ルールの範囲内であればどれだけやってもよいではないかということがエクストリームになると、どんどんルールを厳しくしなければいけなくなり、余地がなくなって均質化していく恐れがあるので、規範のようなものをどのように捉え直すかは重要であると思う。

Ｂテーブルファシリテーター

続いて、三川委員にお願いする。

三川委員

私は、言語化されない京都らしさと書いた。私も現在、東京と京都の二拠点生活を送っており、２年前に京都に引っ越したが、その時に非言語コミュニケーションが多くあった。暗黙のルールがあり、それを知っているか知らないかによって、この人はまだ京都人ではないという無言のコミュニケーションがあったりする。それは知らないのかと言われたこともあり、選別されている感じが閉鎖的だと受け取ってしまうことが多々あり、もったいない。京都らしさを守るのはよいが、京都らしさを内と外の話でいうと、外に伝える時に遮断されてしまっているのがもったいないと感じる。

もう１つは、誰のための京都デザインなのかという話である。今後の京都はどうなるか、京都はもっとこうなるとよいと考える時に、大きく分けて観光と地元、暮らしやすさの２

つの軸で考える場合があるが、観光や経済のためにどのように発展するのかという視点で考える傾向にあると感じている。

例えば、家の近くに小さいベンチがあり、おばあさんがよく散歩の休憩所として座っていたが、最近ふと気付くと、電動キックボードのステーションになっていた。地元の人の憩いの場だった所が、別の誰かのための場所に変換されてしまっているのを目にした時に、この場もそうだが、私たちは誰のための京都デザインを考えているのだろうかということを見失うことが多々あるのではないか。

Ｂテーブルファシリテーター

三川委員は誰のための京都デザインをしたいと思うか。

三川委員

２年住んで、やはり暮らしやすさはもっと考えたいので、地元の住民のためである。

池坊委員

開発というキーワードもあったが、一部の主導している集団に引っ張られているように思うし、観光客も今は特に何回も通って観光地に対して関係性や理解を深めていこうという流れだと思うが、そのような一時定住者やいっときの滞在者も含め、京都を閉鎖するのではなく、取りあえず体験や協働など、関わっていく方向で組み込んで、暮らしやすさや地域のなじみを深めていくのがよいかと思う。

田口委員

総合計画の主語を私たち京都市民とするかどうかという事務局からの説明もあったが、解像度がいろいろあり、地元もこちらとこちらでは違ったり、私自身もカルチャー好きとして本屋に行く時の主体性と、公務員としての主体性で変わったりする時に、誰をどのように考えるのかは、流動していくし、どのように捉えるべきか難しい。

池坊委員

京都市民の関わり方と結構京都好きな人の関わり方、そして初めて京都に来た人の関わり方で、それぞれ少しずつ京都に対する責任や面白さ、醍醐味が変わっていくように、多層的な関わり方でいいのではないか。

京都の入り口は狭いとか、住人も文化も取っ付きづらく、ハードルが高いと言うが、文化人の立場からすると、誤解されても困るので広げっ放しがよいとも言いづらい。だから、広くて少しの段差しかないようなカジュアルな入り口と、興味のある人向けの奥まった醍醐味も分かる入り口など、いろいろな入り口を用意してあげるとよいのではないかと思う。

先日、１時間半ぐらいのプチ能という、３０分の語りと１時間弱の短い演目を見て楽しむものがあった。それであれば、友達を誘って行きやすいと思った。そういった入り口もあり、本格体験の入り口もあるとよい。

田口委員

以前シカゴの音楽文化に関する話を聞いたときに、気軽に入ることのできるお店で、バンド演奏している所が普通にあって、トップのレベルが高いのはボトムが広いからではないかという話があった。

池坊委員

ボトムが痩せると、トップも痩せていくのだろう。

２回目

＜出席者＞

安野　貴博　委員

大井　葉月　委員

仲田　匡志　委員

仲田委員

１つ目は、本物が本物として存在しているまちである。信楽焼は信楽の土で作ると信楽焼だが、京焼はどこの土でも京焼と言われる。つまり京都で作られたというところに価値があり、よいものとして都に集まってきて、本物が本物として認識されているまちの価値観があることが京都らしさかと思う。つまり信楽焼の土で作ったから信楽焼と言う基準ではなく、本物という何かがあるから本物であるという不変的なものがあると思っている。

その上で、目に見えない価値を価値と捉えて評価している。あるカルチャープレナーの方が最初に京都以外で事業をされていた時に、金融機関と話をしてもあまり理解してもらえなかったが、京都の金融機関と話すと、理解が深く、融資を含めた話もスムーズだったという話がある。これはビジネスの視点で見た時に、見えないものを信じることももちろんそうだが、見えないものを積み重ねてきて、１２００年続いているというまちの積み重ねが、見えないものも価値としてきちんと捉えているのではないか。むしろその部分に対する敬意の方が高いのではないかと感じている。

次のキーワードは不易流行である。変わらないために変わってきたまちであり、老舗や長寿企業が自然に時代に応じる営みを続けてきていることを見た時に、世界を見ても類を見ないものがあることも含めて、変えていけるところと、逆に言うと、変えないものもきちんと分かっているというバランスを大切にしているまちかと思う。

最後は、京都市民が意識しない京都がそこにあることが京都らしさかと。先人たちは果たしてこれが京都だと思って残してきたのだろうかという問いが生まれてきた。そもそも京都らしさとは何だろうと思った場合に、振り返った時にこれが京都らしさだとなるものもあるとすると、残さないといけないので、京都らしさが残り続けるところもあれば、これは京都らしさだったと、後で気付くものもあるかと思う。

たぶん何か振り返った時に、これは京都らしさというもので先人たちが残してくれた今の京都らしさがあるように、今の私たちが何かを思って動いてきたことが未来の京都らしさになるものもあるかと思った。

Ｂテーブルファシリテーター

続いて、安野委員にお願いする。

安野委員

１つ目が創作と思索である。古くは源氏物語から、最近は森見登美彦さんや万城目学さんなど、京都をモチーフとした物語が非常に生まれやすい都市であると思うし、それは哲学の道や京都学派など、深い思考に没頭できる感覚があることが一つの京都らしさかと思

う。

２つ目は伝統と技術のバランスである。伝統を大事にしている土壌があることに加えて、一方で京都を発祥とする多くのものづくり企業があり、ノーベル賞受賞者も多く輩出し、伝統的なものと最新技術への投資がどちらに偏ることなく、両方にあるバランス感が面白いと感じる。

３つ目はスタートアップマインドである。これは先ほどの最新技術にも通じる部分だが、最新技術を使って事業をつくることが昔からずっと行われ続けてきたのではないかと思う。最近だと、はてなや任天堂、戦前はオムロンだろうか。そのような日本に閉じず、グローバルに挑戦する企業が継続的に生まれている。現在、スタートアップ業界でもＩＶＳやＩＣＣなど、アントレプレナーと呼ばれている人たちにとって１年に１、２回は京都に集まっていろいろ情報交換する流れがあり、スタートアップと京都の位置は近い。よく考えてみると、今の伝統工芸と呼ばれているものも当時の最先端技術であり、当時のアントレプレナーシップ、スタートアップだった可能性があると思っているので、今に始まったことではなく、脈々とあることかと思っている。

Ｂテーブルファシリテーター

伝統と技術のバランスは、不易流行とも重なってくるかと思うが、仲田委員はいかがか。

仲田委員

とてもそう思う。まさにバランスも大事である。答えはないが、京都のバランスと例えば東京や大阪のバランスは何が違うのだろうという問いが次に生まれてくるのではないかと思った。

大井委員

仲田委員がおっしゃった本物が本物として存在できることは、非常に納得した。反対に自分は京都らしさを損ねるものとして挙げた。逆の発想で、似せたり、本物をまねしたりするものは丁寧さに欠けると思うので、京都らしさではとても共感した。

ここには出てきていないことでいうと、京都はやはり歴史的な建物が多いとよく言われるが、それらが日常生活と調和していると感じる。どうしてもよく観光が取り上げられるが、例えば早朝に清水寺へ散歩に行くのが日課の方もいるという話も聞く。私は京都にずっと住んでいてもそのような生活をすることがないが、そのようなことも京都らしさなのかと思っている。

仲田委員

京都を味わっている感じだろうか。

大井委員

そうである。少し得した感じ。

また、紹介文化も京都らしさの一つかと思う。

仲田委員

信頼監視社会と言われたりもする。

大井委員

それが良くも悪くも京都らしさではないかと思う。本当に信頼で成り立っていると感じる。ここに書いているのも、信用と信頼を大事にしているのがザ・京都である。

Ｂテーブルファシリテーター

なぜ京都の人はそれを大事にするのだろうか。

仲田委員

信頼以外を大事にすると、たぶんバランスが崩れたのではないか。面白さやお金になるかどうかなども大事な要素だと思うが、それが一番上に来た時に崩れたのではないだろうか。京都以外の資本が先斗町に入り、そこのまち並みが変化したとすると、そもそもそれを許したのは何かといえば、その土地を手放したり、貸したりしたことである。その時に何を優先したかというと、お金かもしれないし、そうせざるを得ない状況をつくった周りの環境もあるかもしれない。このまちを守り続けたいという信念や連帯感が弱くなると、このまち並みは変えられてしまうし、守れなくなる。

優先順位として、このまちはみんなで守るという信頼があるから、売らずに守り続けている。これは自分だけがそのように思っているかもしれないと思った瞬間に、たぶんそれは大事なものではなくなってしまう。

Ｂテーブルファシリテーター

続いて、仲田委員から京都らしさを損ねているものについて、発表をお願いする。

仲田委員

京都らしさを損ねているのは、京都らしさを定義することだと思う。先ほどのテーブルで少し出ていたが、奥行きや行間、間合いなど、いわゆる捉えられないもの、感覚的なものが京都らしさをつくっている。はんなりは京都らしいが、はんなりという言葉は京都らしいのかというと、そうではない。

つまり、みんながこれだと分かりやすく定義するものは、恐らくもう京都ではなくなる感じがするので、あまり定義し過ぎず、言語化し過ぎず、それぞれの解釈の余白が少しありながらも変化でき、絶えず流動的であることが京都らしさを守ることかと思った。だから、定義すると分かりやすくなるが、大衆になってしまう。大衆化してしまうと、他都市もまねができ、その瞬間に京都らしくなくなってしまうのではないか。

それから、先ほどの話とつながるが、京都資本とリスペクトである。この資本は、お金だけの資本ではなく、積み重ねてきた京都を資本と捉えて営みをしていたり、暮らしがあったりするところで、すなわちこれまでに対するリスペクトとそのリスペクトを未来に向けた行動があるかどうかは、京都という資本をきちんと扱えているかどうかだと思った。

そこに対する敬意や京都の資本の上に商売をしたり、暮らしたりしていることがなくなると、バランスが悪くなってしまう。

Ｂテーブルファシリテーター
先ほどの信頼や京都をみんなでシェアしているという感覚なのか。

仲田委員
先ほどのテーブルで消費という言葉がキーワードで出ていたが、資本は消費するものではない。むしろ老舗や長寿企業さんが持っているような、たとえそれを使ったとしても、それを戻すという感覚が京都資本の捉え方に近い。

Ｂテーブルファシリテーター
循環したり、蓄積していったりする意味合いで、消費してなくなるものではないということが京都資本の意味合いか。

仲田委員
その通りである。それが京都らしい資本の捉え方かと思う。経済資本になると、きっとそれは消費だろう。琵琶湖疏水事業などのようなとんでもないことができてしまうのはそのようなことだろう。琵琶湖から水を引っ張ってくる計画をすることはすごいことである。

Ｂテーブルファシリテーター
続いて、安野委員にお願いする。

安野委員
１つ目は、オーバーツーリズムである。よく言われている話だが、サービス供給能力と需要のギャップが生まれているように思う。需要が増え過ぎると、経済学的にいえば、価格を上げるしかない。価格を上げると、事業者は儲かるが、観光に関係ない人たちは儲からないという格差の拡大と、その場に住んでいる地元の方々が今までと全然違う価格帯で生活することになり、悩ましいところである。
２つ目は、綿密な計画と効率主義である。まち中の雰囲気の話だが、綿密につくられ過ぎると、資本が入り、効率的なまちづくりがされる。遊びがなくなり、けしからん感じやうさん臭い感じが全くなくなってしまう。
３つ目は、京都だからよいのだという権威主義である。京都であることを武器にし過ぎないことが大事ではないかと思っている。既存の京都だけが武器になったり、既存の京都の権威だけを使ったりしていくと、それは縮小均衡になるかと思っている。

Ｂテーブルファシリテーター
続いて、大井委員にお願いする。

大井委員

先ほども少し触れたが、昔からあるように外見だけを見せたり、似せたり、本物らしさを損ねてしまうのは丁寧さが足りないというか、無理に京都になろうとしている雑さや粗さが見えてしまうと、京都らしさは損なわれるのではないか。美学として持っている雰囲気を損なう派手さがあるのではないかと思っている。

私は清水寺や八坂神社などがある辺りに通勤しているが、オーバーツーリズムで、11 月と 3 月は仕事に行きたくない程混雑している。

３回目

＜出席者＞

伊住 禮次朗　委員
大竹 莉瑚　　委員
杉田 真理子　委員

Ｂテーブルファシリテーター

それでは、これまでの議論で気になる点がある方はおられるか。

伊住委員

価値を創造するところに関連するが、いろいろ話す中で、京都というまち自体は目に見えるものも、目に見えないものも先人が積み上げてきたまちだと思う。京都らしさが何かという時に、ゼロから１をつくるという話はもちろんあるが、まちの中にあるものを上手に活用し、自分がそこに飛び込んで京都の風景の一部になるところが京都らしさではないかという話があった。

私の知人の話だが、鴨川の北大路橋の近くに２畳ぐらいのベンチのようなものがあり、そこにお茶室をつくって通りの人たちにお茶を振る舞っていた少し変わった茶人がいた。その人は京都市の人ではなかったが、何となくその場所がお茶室に見立てられるので、自分なりの美学を持ってお茶をしていた。それが私にとっては京都の風景だった。

これは主語の話にもつながるが、京都市民にとっての京都と出入りがたくさんある京都というまちの中で、入って出ていく人たちに京都に残していってもらうもの、それは京都という場所を使って何か新しいものが生まれ、新しい景色が生まれるところが非常に京都らしくてよいと思う。

出て入っていくという流動的な人の動きをいかに京都の中に遺産として残していくかは、これからの京都を考える中で重要な議論のポイントではないかと思う。先の話になってしまったが、京都の良さとしては、風景の中に自分が入り込める何かがあることではないかと思っていた。

損ねているものについては、やはりオーバーツーリズムで局所的に混み過ぎているという前提がある。私の実家が金閣寺の近くだが、バスしかない。金閣寺道という信じられないぐらい並ぶバス停で、生活の足には到底ならない。ただ、甥はバスに乗って小学校に行っているが、私が小学生の時よりも圧倒的に混んでいる。全体設計として局所的に交通の集中が起こることを、どのようにすれば解決できるのか。これは京都を辛くさせる、損ねるポイントである。しんどいと、集中して良さを見つけることは難しい。

大竹委員

価値の創造はやはり重要である。人口減少が確実で、個人的には経済は発展させなくてもよいかと思っている。今後の人口規模に見合ったサイズに縮小することは悪いことではない。そのようなものは価値を創造することになると思う。人口が減るからと言って、無理やり子どもを産ませるようなことがあってはいけないし、子どもを産むか、産まないか

は自分の意思なので、産みたくない人がたくさん集まるのであれば、子どもがいなくても楽しく暮らせるまちにしていけばよいと思う。

もう一つは、京都は大衆化してしまった点である。カウンターカルチャーなど、京都は何か新しいものが生まれていく場所だが、現状消費されてしまっているのは大衆化したからではないか。皆が同じ所に行って、同じバスに乗って疲弊するのは誰にとっても良くない。ではどうすればよいかという時に、面白い個人がたくさんいれば、大衆化したものが分散するのではないかと思う。面白い人だけでなくても、ニッチであることを取り戻していけば、分散もして、楽しそうだと思った。先ほど伊住委員がおっしゃった、自分なりの美学のようなものを持つ方々がいて、でもそれが共存しているような状態がよいのではないか。だから、整理していくというよりも、もっとニッチなものが生み出されていけば、観光も自然と分散していくだろう。

伊住委員

個人という話とは少し違うかもしれないが、京都らしさの１つは、いろいろなコミュニティがそれぞれ自立しているというところにあり、それがニッチな何かを生み出している要素でもある。京都らしさを損ねているものとして、閉鎖的なコミュニティも挙がっていたが、閉鎖的なコミュニティは、ある種ポジティブな面もあり、そこで何か特殊なものが育まれている側面もあるのではないか。

多くの小さなコミュニティが自立している状態は、京都にとってよいことで、そこをどのように、観光客なのか分からないが、地元のカルチャーとして根ざしていけるような土俵をつくれるのか、そういう人たちが、どう活躍できる場所が生み出されているのかなどを、きちんと見つめ直していくことが重要である。京都はカウンターカルチャーが生まれやすい場所であるという点からも重要である。

杉田委員

今、まさに基本計画のようなものをみんなで考えようという場であるが、京都はトップダウンの大きな物語が似合わないまちなのではないかと思っている。大きな物語を１つ作って、それに合わせて整理していくよりは、ボトムアップの小さな物語を拾い上げていく土壌をつくれるところが、これからの京都に必要なのではないか。先ほどのテーブルでも、無計画をデザインするなど、コントロールできないことを包容するような話もあったが、その辺りを求めていくと面白いのではないか。

また、入ってきて出ていく人たちの話も面白いと思って聞いていた。私も移住組で、普段は京都に住んでいる海外の方とやりとりすることが多いが、そういう人たちで、５年住んで出ていって、また戻ってくるということがある。京都の人と一緒に何かをしたり、京都のまちが好きでポジティブなものを残していったりするなど、市民だけではない、昔からの地元住民だけではない層が重要なポイントではないか。京都は学生の割合が全国的に見ても高いと思うが、毎年多くの若者の人口が入れ替わることはすごいことだと思う。そういう意味で、入って出ていく人たちと一緒に何かをしたり、新しい価値をつくったりすることは大切なのではないか。それは観光客も含めてである。

それから、まだ議論には出ていないが、先ほどのテーブルで話していたリジェネラティブシティのような話について、もう少し皆さんとディスカッションしていきたい。これからの都市は、人間だけがアクターであるべきではないと思っており、自然環境、動植物、微生物なども含めて、これからのサステナブルな循環型の社会を考えていきたい。それは、最初に出た、成長しなくてよい、発展させていく必要はないという話につながるが、これから人口が縮小するなど、時代が変わっていく中で、その時代に合わせた都市をどのようにデザインしていくのかについて、皆さんとディスカッションしたい。

大竹委員

現在、全体として人口を増やそうという動きになっており、京都もそういう政策をしていると思うが、人口が出入りする中で減ってきているのに、暮らしている人が楽しいと思えるまちにすることができれば面白いと思う。

伊住委員

前提条件で減るということだろう。

大竹委員

だから、インフラを整備するにしても財源に限界があるので、そういうところではなく、他の部分で魅力があればよいのではないか。

伊住委員

都市が均質化しているという話は、他のテーブルでも出ていたが、東京、ニューヨークなど世界には様々な大都市があるが、それぞれの都市とはまた少し違った方向性を京都は目指せるし、これまでも目指してきたと思う。高さ規制をして、山に囲まれている状況をつくっているなど、自然との共生は京都が取り組んできたまちづくりだと思うので、そこに関して先進的な取組を進めていることは大きなメッセージになる。それによって、やはり京都市外に流出している子育て世代は間違いなく多いが、その中で京都に魅力を持ってもらうには、そういう何か特殊な京都としての個性が必要ではないか。自然との共生にもつながってくる。

先ほど、消費される都市という話が出たが、私もそれはすごく気にしている。入ってくる人、出ていく人、住んでいる人がいて、住んでいる人は住んでいる人で、ずっと文化を守り続けると思うが、入ってきて出ていく人が、どれほどこの都市に、何か遺産のようなものを残していってくれるかということは非常に重要で、それは学生も同じである。だから、京都というまちに出入りする人たちが何を落としていってくれるのかという積み重ねが、どれほど出てくるかが、これからの京都の豊かさにつながるのではないか。学生や海外の方、観光客も含めて、京都のまちづくりにきちんと関われるような取組が何かあれば、より自分事としてまちのことを考えられるのではないか。

今は観光客として来て帰る、学生として４年間住んで、京都を楽しんで地元に帰るだけかもしれないが、その期間に京都に関われる何か、例えば芸術であれば、芸術の表現の場

がきちんとあるということかもしれないし、まちづくりに自分がきちんと関われているという感覚がまちに対する愛情になっていくと思う。

Ｂテーブルファシリテーター

大竹委員は、今もまちづくりに関わられていると思うが、周りの友人など大学生は、まちづくりに関われていない方が多い印象か。

大竹委員

そうである。自分自身もそういった活動と接続していない感じはあるし、私も今の活動を始めて半年ほどなので、それまではこういう場にいることも想像できないくらい、普通の学生の日常生活では接続点がない。

京都らしさを損ねているものの１つ目に、大学があまり面白くないと書いた。例えば政治活動が制限されているなど、お行儀がよいという印象である。また、ビジネスになるようなことにしか研究費用がもらえないということは良くない。それは文化が育たないまちになっていくので、どういうものを残していきたいのかということをきちんと考える必要がある。お金になるものを残していきたいのか、風土をつくりたいのかなどどちらなのかと思った。

もう一つはこの前、海外に１か月ほど行って感じたことだが、都会はどこも見た目が一緒なのがつまらないと思った。だから、京都はそういうまちづくりをしてはいけないと思った。海外に行った時に感じたのが、元々の地形と人柄、どういう人が住んでいるかということで、そのまちが出来上がっている感じがしたので、微生物や今ある自然、ここに元々用意されていたものと、どういう人が住んでいるのかというところで、このまちをデザインしていけたら面白いし、京都らしさが出るのではないか。木を切り倒して、平野にして、ビルを建てるのではなく、地形や風土を生かしていきたい。